



宮城県登米市

とめ
登米市を応援して下さる
全国の皆さんへお届けします



Tome Letter

返礼品事業者紹介

お米 登米ライスサービス株式会社
登米産仙台牛・牛タン 株式会社佐利
麺類 マルニ食品株式会社

寄附金活用事業紹介

**小中学校教育用コンピュータ
(教室用等)機器購入**

登米市立登米小学校

**障害者地域活動支援センター
運営に関する事業**

登米市中央障害者地域活動支援センター よつ葉ハウス

**道の駅津山もくもくランド
災害復旧事業**

道の駅津山 もくもくランド



お米

登米の大地に根ざした米を
産地直送で全国へお届け

登米ライスサービス株式会社



【おすすめ返礼品】
登米市産つや姫
精米5kg×2個セット
定期便全12回



(上) 稲の色の濃さを機械で測定し、栄養状態が行き渡っているかをしっかりチェック。
(左) 全国にファンを持つ登米ライスサービス株式会社の米。定期便でリピート購入する人も少なくありません。

こだわりの栽培法と情熱が育む米

広大で肥沃な平野に位置し、宮城県内でも有数の穀倉地帯として知られる登米市。登米ライスサービス株式会社は、そんな米どころで1996(平成8)年に設立されました。お米の生産から精米、販売を一貫して行い、登米産のお米の普及に取り組んでいます。

同社が販売する米は、同社も一会員として参加している、登米市の農家から組織される『百粒会』が生産したものです。創業者の伊藤氏は、米ぬか・稲わらを使用した循環型の土壌づくりに着目し、農業・化学肥料を使用せず栽培する無農薬栽培(自然農法)や、農業・化学肥料の使用を通常(地域の慣行レベル)の半分以下に減らして栽培する減農薬栽培に取り組んでいます。一方、この道数十年のベテランから30代の若手まで120名以上の地元生産者からなる「百粒会」では、さらにおいしい米作りを目指し、栽培に関する勉強会を定期的に実施したり、新しい農法や栽培方法の情報交換を行うなど、日夜、栽培技術の向上に努めています。

「登米は自然に恵まれ、天災も少なく、ほ場も整備されており、上質な米を安定的

に生産できる地。当社では、安心・安全でおいしいお米を食卓に届けるため、第三者認証を取得し、積極的にトレーサビリティの発信を行っております」と、同社の営業課・千葉真樹さんは語ります。

味と品質には絶対の自信あり!

登米ライスサービス株式会社が扱う米は、主に「ひとめぼれ」「つや姫」「ササニシキ」の3品種で、なかでも一番人気はしっかりととした粒感と適度な甘みが特徴の「つや姫」。山形県生まれの「つや姫」ですが、「ひとめぼれ」に比べると収穫時期が遅いため、「ひとめぼれ」と「つや姫」の両方を栽培している登米の農家さんも多いそうです。「ふるさと納税の返礼品の中では、『ひとめぼれ』と『つや姫』の両方を食べ比べできるセットがおすすです。味や食感の違いをお楽しみください。品質には絶対の自信ありです」と千葉さんは胸を張ります。

地元生産者の高度な栽培技術と情熱が込められた、安心・安全でおいしい登米の米。一度味わえば、毎日食べたくなること間違いなしですよ!

(右)おにぎり、炊き込みご飯、炒飯、ドリア、パエリア、寿司…。登米の米はどんな食べ方をしても美味!

(左)登米産米の販路開拓&拡大を推進する営業課の千葉真樹さん(右)と千葉享さん。「愛すべき登米の生産者の方々が切磋琢磨して育てたお米をぜひご賞味ください!」





【おすすめ返礼品】
登米産仙台黒毛和牛
ランプステーキ500g
(約170g×3枚)

(右)仙台牛の生産量の4割を占める登米市産仙台牛。その味や品質は折り紙付きです。
(左)自社工場でスライスされる牛タン。加工の技術を高めるため、日々研究を重ねています。



登米産仙台牛 牛タン

自社工場にて熟練スタッフが生産 新鮮で良質なお肉を安価に提供

自社工場で処理し、店舗へ直送

急速冷凍の牛タンが大人気！

株式会社佐利は、1949(昭和24)年に精肉店として開業し、1967(昭和42)年に法人化。1977(昭和52)年には燃料事業に参入し、以来、食肉加工・食肉卸・精肉小売を主体とする精肉部と、灯油LPガスの卸と小売を手がける燃料部の二本柱で事業を展開しています。2023(令和5)年6月には代表取締役が3代目となる佐藤利尚さんが就任し、新たなスタートを切りました。

精肉部が取り扱うのは、登米産仙台牛、志波姫ポーク、豚生ホルモンなど。「特に登米産仙台牛は、地元生産者の技術がとても高く、味、品質ともに全国トップレベルです」と、精肉部を統べる専務取締役の佐藤利尚さんは太鼓判を押します。

同社の強みは何といつても、自社工場で訓練されたスタッフが処理した食肉を店舗に直送している点。志波姫ポークに関しては、顔が見える提携畜産農家から上質な豚を一頭買い。豚ホルモンも市内の食肉加工場から内臓を一頭買いしているため、新鮮で良質なお肉をリーズナブルに提供できるのです。

店舗は1989(平成元)年創業の「フレッシュミート佐利」(登米市)のほか、県内に合わせて3店舗を展開。「フレッシュミート佐利」では、生肉のほか、仙台牛入りメンチカツ、志波姫ポークのロースとんかつ、国産若鶏の唐揚げをはじめとする手作り惣菜も好評です。

近年、ふるさと納税の返礼品にも力を入れている株式会社佐利。現在は30アイテム前後を出品しています。登米産和牛はもちろん、このところ評判を集めているのが牛タン。なかでも「業務用たっぷり牛タン1kg」は、あるふると納税サイトの牛タン部門で全国2位になるほどの人気ぶりです。「マイナス40℃の急速冷凍により、牛タンの細胞を破壊することなく味や鮮度を維持できるのがおいしさの秘密です。リピートしてくださる方も多いですね」と佐藤専務。

自然豊かな環境で育まれた登米産仙台牛、急速冷凍技術を生かした高品質の牛タンなど、株式会社佐利のおいしいお肉をぜひ堪能してみてくださいいかがでしょうか。



(上)「登米市は宮城県内でも屈指の和牛生産地。地元がもっとお肉で有名になるように貢献していきたいですね」と話す佐藤利尚さん。
(左)美しい霜降りが入った最高品質A5ランクの登米産仙台牛。柔らかな口当たり、まろやかな風味と豊かな肉汁が魅力です。

株式会社佐利

Tome Letter 02

返礼品事業者紹介

【おすすめ返礼品】
登米つるりん
12個入り

(上) 地域食材と開発麵を使った料理を提供する直営レストラン「麵や文左」を展開。

(左) 「お子さんからご年配の方まで全年代の人にうどんを召し上がっていただき、笑顔になってもらえたらうれしいです」と語る矢内崇義さん(右)と、製造スタッフの岩淵由紀さん(中)、佐藤芳和さん。



麵類

故郷を身近に感じられる
宮城を意識した麵商品が魅力

マルニ食品株式会社

おいしい麵で地域貢献、社会貢献を

明治時代に創業した「麵茶屋」に端を発し、140年近い歴史を誇るマルニ食品株式会社。現在は登米市南方町に本社を置き、麵を主体とした食品の開発・製造・販売を行っています。経営理念は「人材づくり」「感動づくり」「地域づくり」。開発部企画開発課・統括課長の千葉真江さんは、「地域とともに発展し、より良い商品づくりを通して社会貢献していくという想いが込められています」と語ります。

麵文化を長く次代へ引き継ぐために

そんな同社の特徴は、宮城を意識した商品づくりにあります。ふるさと納税の返礼品の中でも人気の「登米はっと油麩セット」は、登米の郷土食である「はっと」と名産品の「油麩」が楽しめる商品。はっとには、登米市豊里町でも生産されている小麦「あおばの恋」を使用しており、「もちもちの食感と地粉ならではの優しい風味、人の手でちぎったような不揃いな形もあいまって、ほっとする家庭的な味わいです」と、

製造部製造課の矢内崇義さんはアピールします。千葉さんによると、登米市から市外へ出た人が故郷の味を懐かしんで選ぶケースが多いそうです。

次いで人気の返礼品が、半生手巻き手延べうどん「登米つるりん」。こちらも「あおばの恋」を用いており、つるつとした食感とコシ、小麦の味わいをしっかりと感じられるのが魅力です。

近年、新たに仲間入りしたのが、地元・登米市のヤマカノ醸造の仙台味噌を使った「仙台辛味噌ラーメン」と、水揚げ日本一を誇る気仙沼港で揚がったカツオを使った「気仙沼かつお醤油ラーメン」。「どちらもしっとりとしたコシのある中細麵を使用しています。常温で100日間保存がきくロングライフ麵なので、お土産や贈答品にぴったりです」と、同じく製造部製造課・課長の高橋宏さんは自信を持ってお勧めします。

千葉さんは、「良いものを作り続けている自負はありますが、まだまだ道半ば。丁寧に撚り・延ばしを繰り返して仕上げる「登米つるりん」。「あおばの恋」の風味と、独特なコシの強さ、なめらかな食感が楽しめます。引き続き、さらに高みを目指しておいしい麵を作り続けていきます」と締めくくってくれました。

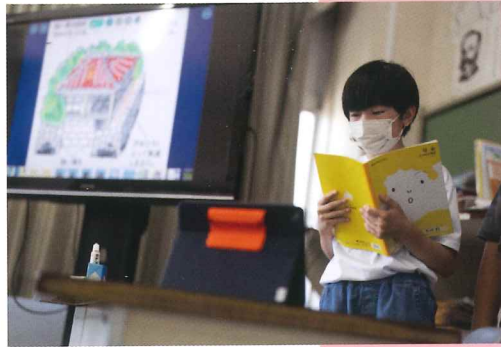
(右) 宮城にある優れた素材を活かしたおいしい手延べ麵を作りたいという思いから生まれた半生手巻き手延べうどん「登米つるりん」。

(左) 手作業により丁寧にねかし・撚り・延ばしを繰り返して仕上げられる「登米つるりん」。「あおばの恋」の風味と、独特なコシの強さ、なめらかな食感が楽しめます。



(右)【社会の授業で発表をする5年生の児童】タブレット端末を使ってまとめた内容をテレビ画面に映し出し、質問を受けたり意見交換をしたりしました。

(左)【グループで担当を決めてプレゼンテーション】タブレット端末はコミュニケーションのツールとしても役立っています。



小中学校教育用
コンピュータ(教室用等)
機器購入

タブレット端末による学習で 学習意欲や表現力が向上

国策に伴い校内のICT環境を整備

より多様で効果的な活用を目指して

ハイカラな洋風建築物や重厚な蔵造りの商家など、明治を偲ぼせる建物が多く現存し、「みやぎの明治村」と呼ばれる登米市登米町。その中心部に建つ登米市立登米小学校は、1873(明治6)年に開校し、2023(令和5)年で150周年を迎えた歴史ある小学校です。浅野克樹教頭は、「伝統校として、明治期に建てられた国指定重要文化財である旧登米高等尋常小学校(現教育資料館)の清掃作業、登米秋まつりでのお囃子参加など、地域と連携した取り組みに力を入れています」と語ります。

2019年に開始された「GIGAスクール構想」(全国の児童・生徒に1人1台のコンピュータと高速ネットワークを整備する文部科学省の取り組み)に伴い、登米小学校では2021年に校舎内の高速ネットワーク回線工事を実施。2022年9月にはiPad63台を追加納入し、全校児童に1台ずつタブレット端末を整備しました。

こうした教育関係のICT整備に、ふろさと応援寄附金の一部が充てられています。

主に調べ学習や発表に用いられているタブレット端末。タッチパネル式なので、低学年の授業でも活用が可能です。「先日は5年生が体験してきた花山合宿の様子を、タブレットを使って4年生に発表しました。プレゼンテーションが苦手の児童でも、タブレットだと意見を発表しやすいようです」と浅野教頭。授業でより効果的に活用できるように、先生方も新しいソフトやアプリの使い方を研修で学びながら、ICT教育の指導力向上に努めているそうです。「寄附金のおかげで全校児童194名すべてにタブレット端末が行き渡り、とてもありがたいです」と述べる秋葉校長。まだまだ多様な使い道があると思うので、先生方もより一層研修を重ねながら、学習や発表、コミュニケーションのツールの一つとして活用していきたい、と話していました。

登米市教育委員会では、教育現場での良好なICT環境の整備に関して、今後ともふるさと応援寄附金を活用していく方針です。全国からの温かい善意が、未来を担う子どもたちの学力向上に役立っています。



(上)「今後はICT機器を使って他の小学校ともネットワークを持ち、学習の場をさらに広げていきたいですね」と語る秋葉徹校長(左)と浅野克樹教頭。

(左)タブレット端末の活用は、児童の興味・関心を引き出し、学習意欲、思考力・表現力・判断力の向上につながっています。

登米市立登米小学校

Tome Letter 04

寄附金活用事業
紹介

障害者地域活動支援
センター運営に
関する事業



(上)電子部品を組み立てる下請け作業。細かい手作業のため集中力が養われます。
(左)ステンシルシートを使い、布バッグにイラストを転写する作業。最初は尻込みしていた利用者さんも、経験を積むことで立派な作品を仕上げられるように。



社会とつながる第一歩として 作業や作品づくりの機会を提供

登米市中央障害者
地域活動支援センター
よつ葉ハウス

居場所やふれあいの場としても機能

センターの運営費に寄附金を活用

障害者地域活動支援センターとは、何らかのハンデキャップを持ち、就労または地域社会活動への参加がしづらい方々のサポートをしている通所型施設のこと。登米市内には市が運営する障害者地域活動支援センターが2ヶ所あります。1つが米山町にある「米山障害者地域活動支援センター」。そしてもう1つが追町にある「中央障害者地域活動支援センター」です。

市内の4施設を統合し、2021(令和3)年に誕生した「中央障害者地域活動支援センター」、通称「よつ葉ハウス」。ここでは下請け作業や自主作品の制作などを行っています。「作業を通し、地域とつながるきっかけを作ることが施設の役割。現在は20(60代まで)23名の方が登録されており、それぞれの特性や好みに合った作業をしています」と話すのは、登米市福祉事務所の清水大地さん。居場所や交流の場としての意味合いも大きく、「コミュニケーションがうまく

取れなかった人でも、仲間と作業を進めるうちに会話が生まれ、気持ちがあほぐれるという良い効果も生まれています」と指導員の佐藤雅子さんは語ります。

ふるさと応援寄附金は、建物の修繕や備品の購入など、センターの運営に活用されている。ここで制作される自主作品は、クラフトバッグやかご、メモ帳、マグネット、ストラップなどさまざま。これらは施設内で月1回開催されるマーケットや、市内の物産館や販売所で展示販売されています。「ご自身が作った作品が売れることは、大きな自信になり、やりがいや希望につながっています。そうした意味でも、みなさまからのご支援のおかげでセンターの役割を保つことができ、本当にありがたいと思っています」と清水さんと佐藤さんは口をそろえます。

これからの展望を伺うと、「社会とつながるための最初の一步、ステップアップの場として、さらに意義のある施設にしていきたいです」と清水さん。佐藤さんは「地域社会と触れ合えるような活動や体験をもっと充実させていきたいですね」と力強く答えてくれました。



(右)清水大地さんと佐藤雅子さん。「より活発な施設に」という想いは一つ。

(左)入口には利用者さんが自主制作した作品が並びます。



道の駅津山
もくもくランド

(右) 地域産材をふんだんに使ってリニューアルされた「道の駅津山 もくもくランド」。
(左) 駐車場や公園も含め、被害は広範囲に施設内の木工品や什器なども水浸しになりました。



道の駅津山もくもくランド 災害復旧事業

多くの人の尽力を得て本格復旧

町の面積の大半を植林した杉の山が占める登米市津山町。そんな林業のまちに建つ「道の駅津山 もくもくランド」は、2019（令和元）年10月の令和元年台風19号に伴う記録的な豪雨により、大きな被害を受けました。

施設北側の南沢川が氾濫し、施設にも大量の水が押し寄せ、地域の特産である矢羽木工芸品や産直品の販売施設、食堂、駐車場、公園などに甚大な被害が出たのです。駅長の西條孝一さんは、「めちゃくちゃになった施設内を目の当たりにして、復旧できるか不安になりました」と当時を振り返ります。しかしながら、全国から集まったボランティアをはじめ、登米市内、隣の南三陸町や栗原市などからもたくさんの方の協力を得て、2週間後には仮店舗で営業を再開することができました。

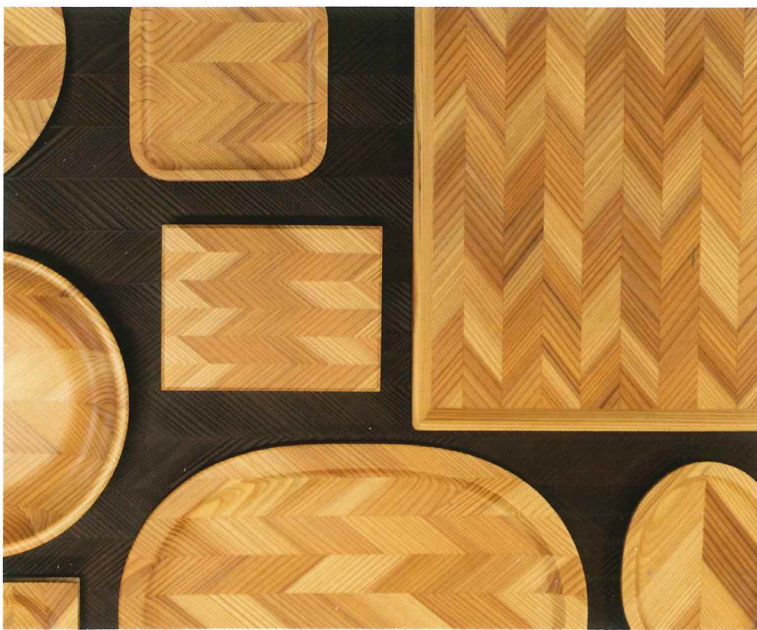
仮店舗で営業を行う傍ら、本格復旧に向けての作業も進みました。そして2022（令和4）年12月のプレオープンを経て、2023（令和5）年1月、「道の駅津山 もくもくランド」はようやくリニューアルグランドオープンを果たしました。

台風の浸水被害から3年 新しくリニューアルオープン

地域産材を使い、環境にも配慮

新しく生まれ変わった「道の駅津山 もくもくランド」。水に浸かった木工品等販売施設は、再び同規模の水害が発生することを想定して基礎を約1メートルかさ上げし、施設内の床と腰壁は全て地元産材を使用して張り替えられました。屋根の看板も景観に合わせたデザインに二新し、駐車場から店舗に直接入れるよう木製デッキも設置しています。また、施設の冷暖房設備には、市内の豊かな森林資源を活用した木製チップを燃料に使用する木質バイオマスボイラーを導入。未利用材の有効活用により、エネルギーの地産地消を実践しています。

今回の復旧にかかった総事業費のうちの一部は、ふるさと応援寄附金で賄われています。「全国の方に応援していただいたこと、深く感謝申し上げます。このことを支えに、整備された施設を有効に使って、地域の良いものをみなさまにお伝えしたいと思います」と西條さん。今後は地域の人たちが便利に買い物できる提案型の売場づくりや、来場者が参加できる楽しいイベントなどにも力を入れていきたいと力強く話していました。



(上) スタッフの佐藤裕子さん。「家族で楽しめる道の駅です。ショッピング、散策、休憩にぜひご利用ください!」
(左) 津山杉を丹念に継ぎ合わせて作る美しい矢羽木工品。

道の駅津山
もくもくランド

Tome Letter 06

寄附金活用事業
紹介

渡り鳥の楽園「登米市」に
ぜひ、お越しください



ラムサール条約湿地 伊豆沼



うまし、
たくまし、

登米市

登米は、うまい。

豊潤な登米耕土から生まれ、

大切に育まれる恵みは、

素朴だけど味わい深い食になる。

登米は、たくましい。

代々培われてきた地域の絆は、

そこに暮らす人々を結び、

たくましく生きる活力を生む。

登米は、うまくて、たくましい。



登米市
ホームページ

冬



秋



夏



春



お申込み
お問い合わせ

宮城県登米市役所 まちづくり推進部
観光シティプロモーション課 ふるさと定住係

〒987-0511 宮城県登米市迫町佐沼中江二丁目6番地1

TEL 0220-23-7331 FAX 0220-22-9164

http://www.city.tome.miyagi.jp E-MAIL tome-life@city.tome.miyagi.jp

発行日/令和5年9月



楽天



さとふる



チョイス

ふるさと納税の申込みはこちらから↑